

## 街・建物・暮らし5

水力の偉大さや発電の仕組みなどを楽しく学べる出色のテーマパーク  
～埼玉県立「川の博物館」を訪ねる～



そばで見ると、まさに見上げるような迫力の「日本一の大水車」

この夏、埼玉県寄居町にある埼玉県立「川の博物館（以下、かわはく）」に行った。「かわはく」は1998（平成9）年8月、秩父・長瀬にも近い荒川上流部のすぐ横に建てられた施設で、山地と河川だらけの日本列島で暮らしてきた日本人と河川の関係をも、大づかみに感じ取るのにぴったりの施設として人気がある。

ご承知のように荒川は、埼玉県・山梨県・長野県の3県にまたがる甲武信岳を水源としている。そして広大な秩父山地から流れ来る水を集めつつ、秩父盆地を縦断。寄居町で関東平野に出ると、熊谷市、川越市、戸田市などを貫流し、新岩淵水門（東京都北区）で隅田川が分流するが、本流はそのまま江東区と江戸川区の境をなしつつ、最後は東京湾に注ぐ。

荒川の流路延長は173km、流域面積は2940km<sup>2</sup>、さらに埼玉県鴻巣市・吉見町を隔てる御成橋付近で、最大川幅2537mとなるが、この川幅は日本一だという。このように日本有数の長大かつ

広大な規模を誇る荒川の治水事業は、利根川のそれとともに、徳川家康が幕府を江戸に構築する以前からの、大きな問題だった。半面、その膨大な水量がもたらす恩恵も計り知れず、関東の人々は古来、荒川に悩まされつつ利用しつづけてきたともいえる。

写真の大きな水車は「かわはく」の目玉施設の一つだ。直径24・2mは日本最大。水力エネルギーの強さや、水力を利用して生きてきた日本人の暮らしを端的に見せるために建設されたようだ。大水車の隣には水車小屋2棟が復元され、農業や発電に水車が利用されてきた歴史を学ぶことができる。

そもそも水力発電は水流により回転する水車の動力をタービンに置き換え、米を脱穀する仕組みを、発電機に転換したもので、水車はまさに水力発電の母ともいえる。電力関係の博物館は全国各地にあるが、そんな素朴な電力の祖型と仕組みを遊びながら学べるという意味で、「かわはく」はとりわけ素晴らしい施設だ。（砂耳）